

令和2年度 第1回ハタハタ資源対策協議会

1. 秋田県における漁獲量の推移

表1. 秋田県における漁獲枠と漁獲実績（管理漁期9月～翌6月）の推移（水産漁港課調べ）

年	沖合			沿岸			合計			
	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	
平成	9年	180	148	82	180	280	155	360	428	119
	10年	300	162	54	300	438	146	600	599	100
	11年	400	142	36	600	580	97	1,000	722	72
	12年	400	265	66	600	902	150	1,000	1,166	117
	13年	520	506	97	780	986	126	1,300	1,493	115
	14年	680	384	57	1,020	1,570	154	1,700	1,954	115
	15年	960	907	94	1,440	2,051	142	2,400	2,958	123
	16年	1,000	707	71	1,500	2,349	157	2,500	3,055	122
	17年	1,000	489	49	1,500	1,867	124	2,500	2,356	94
	18年	800	944	118	1,200	1,640	137	2,000	2,584	129
	19年	720	847	118	1,080	765	71	1,800	1,612	90
	20年	1,200	868	72	1,800	2,035	113	3,000	2,903	97
	21年	1,040	1,054	101	1,560	1,475	95	2,600	2,530	97
	22年	960	457	48	1,440	1,277	89	2,400	1,734	72
	23年	1,120	677	60	1,680	1,287	77	2,800	1,964	70
	24年	1,080	376	35	1,620	931	57	2,700	1,307	48
	25年	768	624	81	1,152	898	78	1,920	1,522	79
	26年	672	285	42	1,008	940	93	1,680	1,225	73
	27年	320	438	137	480	686	143	800	1,124	141
	28年	320	450	141	480	393	82	800	844	105
	29年	290	241	83	430	240	56	720	481	67
	30年	320	325	102	480	287	60	800	612	77
令和	元年	325	296	91	325	479	147	650	775	119

- 令和元年漁期（9月～翌6月）漁獲量は、沖合296トン（前年比91%）、沿岸479トン（前年比167%）、全体775トン（前年比127%）であった。

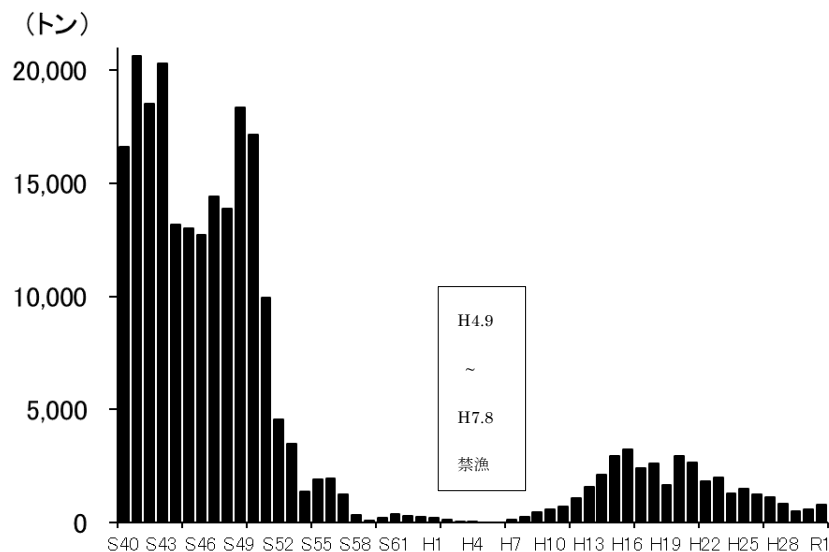


図1. 秋田県における漁獲量（1月～12月）の推移
 （H30までは農林水産統計、R1は水産振興センター調べ）

- 令和元年（1月～12月）漁獲量は、780トン（前年比129%）であった。

2. 日本海北部5県における漁獲量の推移

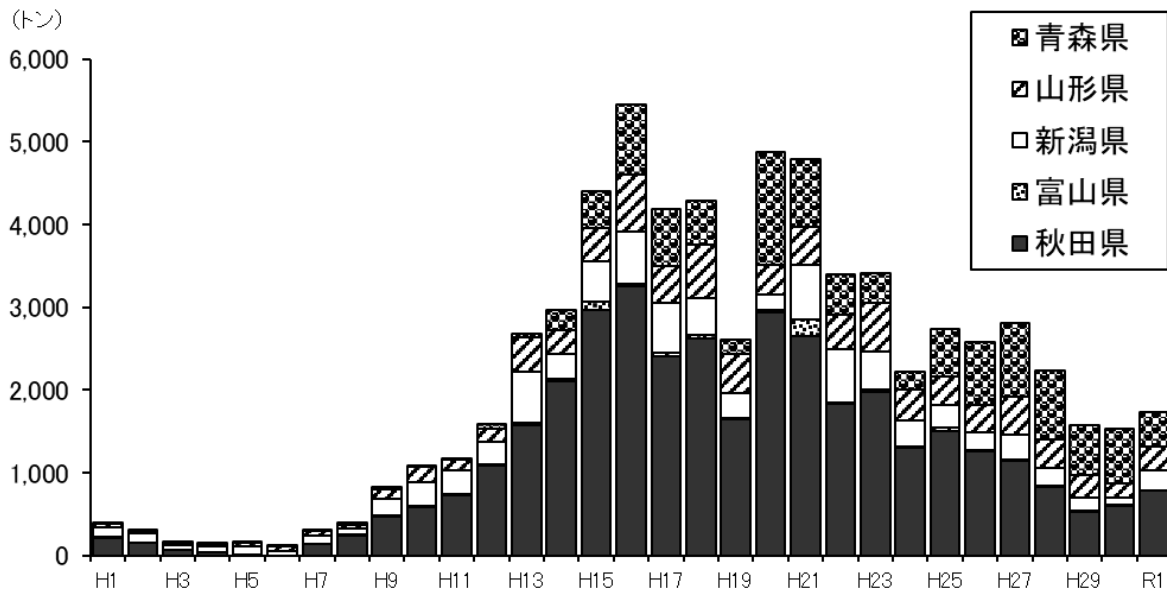


図2. 日本海北部5県における漁獲量（1月～12月）の推移（日本海区水産研究所調べ）

- 令和元年（1月～12月）の日本海北部5県における漁獲量の合計は、1,746トンで、前年より217トン増加した。
- そのうち、秋田県の割合は、45%で前年より5%上昇した。
- 県別では、青森県422トン（前年654トン）、山形県294トン（前年181トン）、新潟県243トン（前年85トン）、富山県7トン（前年4トン）、秋田県780トン（前年605トン）であった。

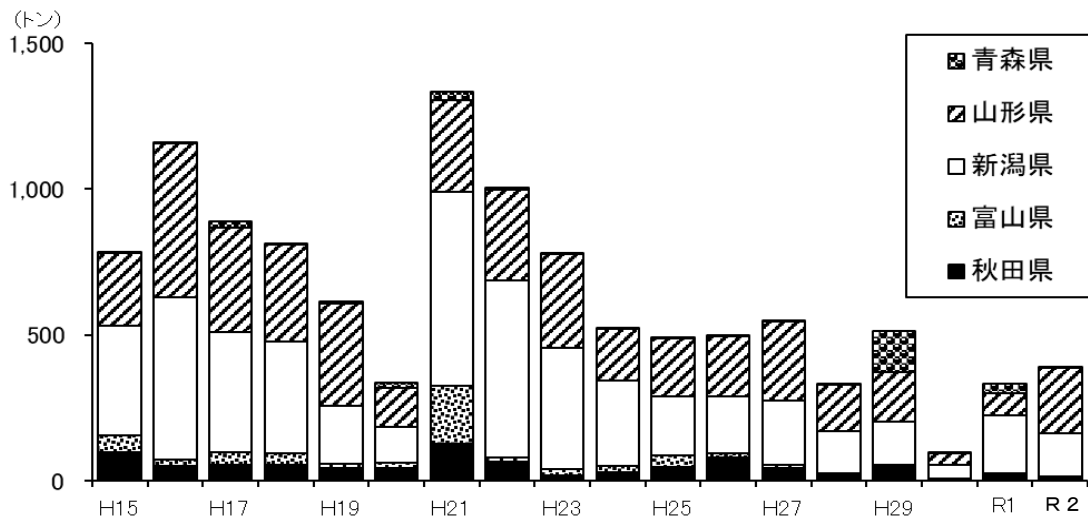


図3. 日本海北部5県における漁獲量（1月～6月）の推移
（R1までは日本海区水産研究所調べ、R2は各県聞き取り）

- 令和2年1月～6月の日本海北部5県における漁獲量〈速報値〉の合計は、392トンで、前年より57トン増加した。
- 県別では、青森県3トン（前年32トン）、山形県224トン（前年78トン）、新潟県149トン（前年197トン）、富山県1トン（前年7トン）、秋田県14トン（前年20トン）であった。

3. 底びき網での調査結果

① 漁期（11月）

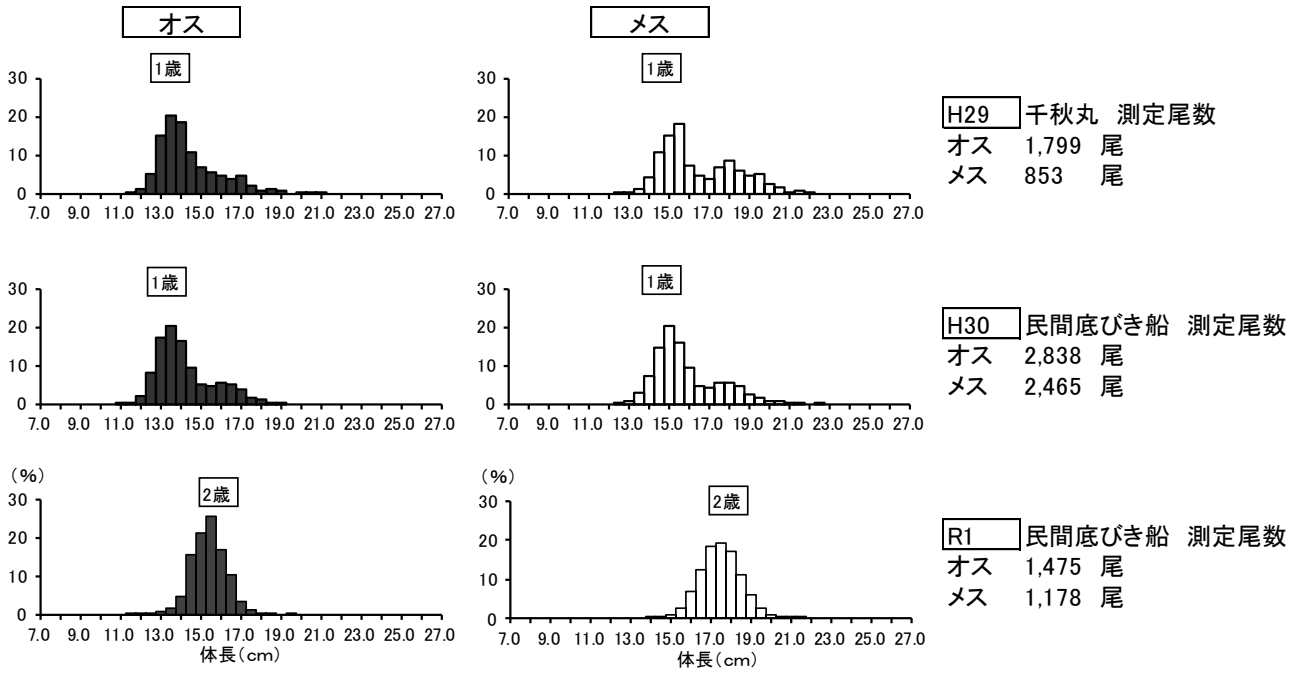


図4. 体長組成（11月）

② 漁期前（4、5月）

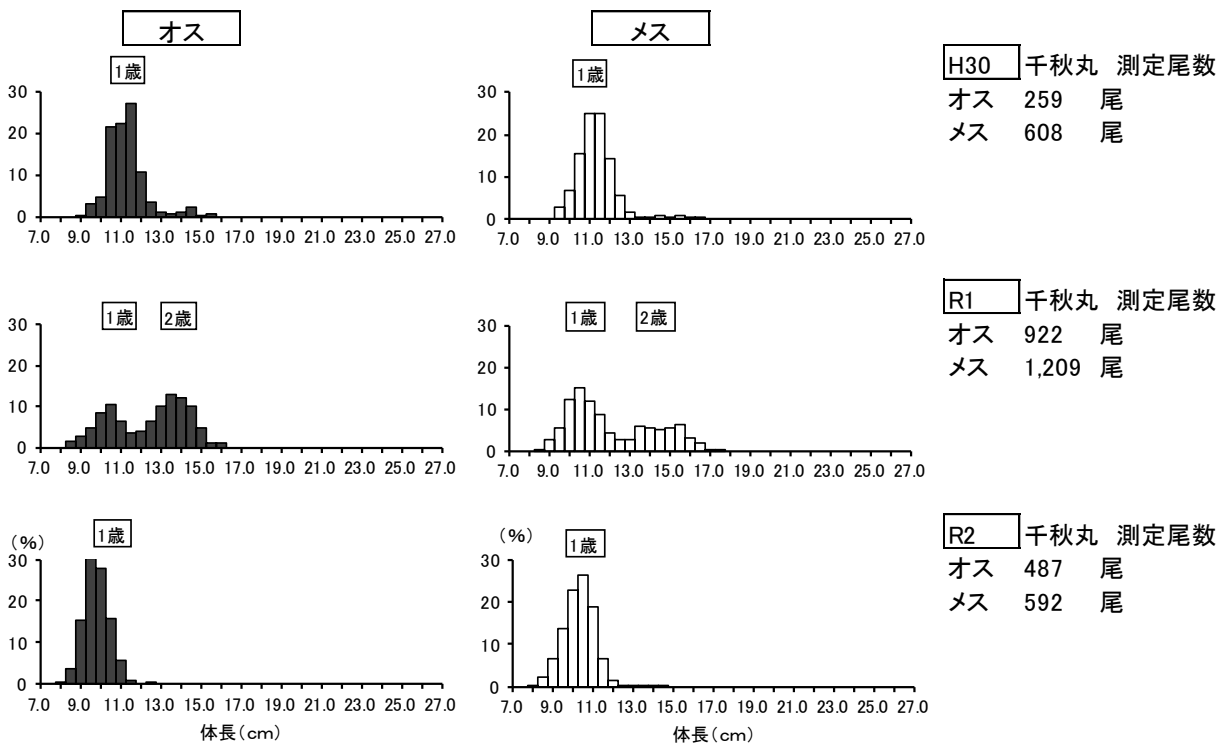


図5. 体長組成（4、5月）

③ 漁期（9、10月）

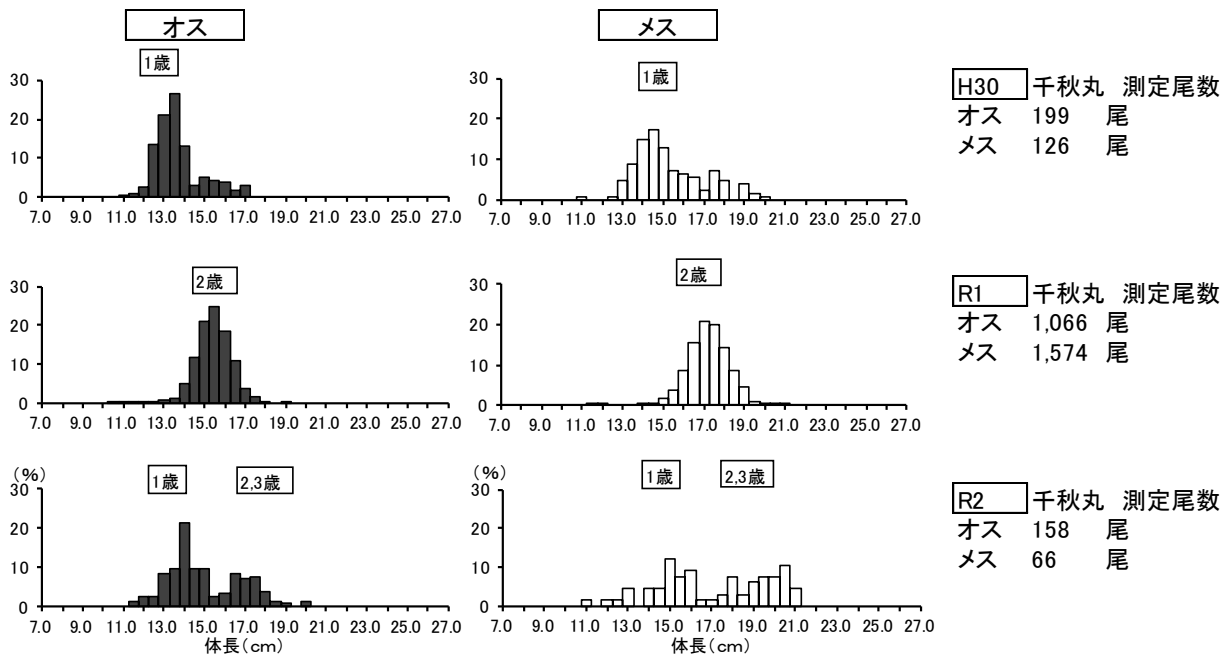


図6. 体長組成（9、10月）

表2. 令和2年漁期（9、10月）における千秋丸による漁獲個体の年齢推定結果

年齢	オス(尾)	メス(尾)	計	
1歳（ふ化後約19か月-）	94	28	122	小型魚
2歳（ふ化後約31か月-）	30	10	40	中型魚
3歳-（ふ化後約43か月-）	34	28	62	大型魚
計	158	66	224	

[令和2年漁期の傾向]

○ 年齢別個体数比は、1歳魚（小型）＞3歳魚（大型）＞2歳魚（中型）と推定する。

令和2年漁期のハタハタ資源と将来予測

- 令和元年漁期より、2歳魚（中型）が減少し、3歳魚（大型）は増加するが、日本海北部資源は、増加傾向にはない。
- 資源の維持・増大には、取り残しを増やすことが重要である。
- 今後10年の本県漁獲量の推移を将来予測したところ、資源維持するためには、令和2年漁期の漁獲量は、650トン程度に抑えることが望ましい。

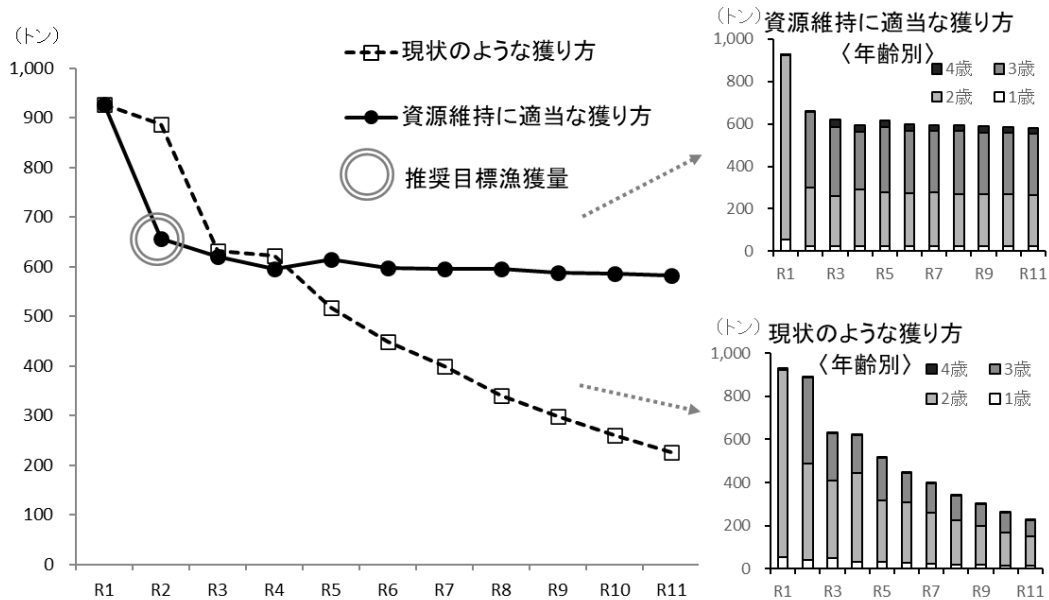


図7. 獲り方（漁獲努力）の違いによる、本県推定漁獲量の将来予測

〈図7の説明〉

獲り方（漁獲努力）とは、操業隻数・網数・日数などを反映した指標値であり、水産資源解析では一般的に用いられる。

なお、R1 漁獲量は、未報告分などを含む漁獲量を水産振興センターで推定した値である。

- ・ 資源維持に適切な獲り方：過去の平均的な獲り方（漁獲努力）の半分で操業を続けた場合
- ・ 現状のような獲り方：過去の平均的な獲り方（漁獲努力）で操業を続けた場合

令和2年漁期 秋田県目標漁獲量 650トン

- 令和2年漁期への提案 -

○ 漁獲枠が小さく、また、高齢化などにより作業負担が増加している現状では、これまでの漁獲枠管理に加え、漁期中の漁場ごとの状況に合わせ、地区/漁法ごとに、次のようなルールに基づいた漁業管理を行うことが適当と考える。

- ▶ 共同操業による操業日数縮減：底びき網、網数縮減：定置網、わかべ網、さし網
- ▶ 操業日数・時間短縮：定置網、わかべ網、さし網
- ▶ 網目合拡大：底びき網、定置網、わかべ網、さし網

○ 漁獲物は、全て漁協に出荷し、無駄なく売り切り、収益を確保する。

○ 操業日誌を記録し、地区/漁法ごとの操業実態（漁獲努力）を継続的に把握する。

- 将来へ向けての提案 -

○ 地区/漁法ごとに、「ルールに基づいた漁業管理」手法を考える。

○ 「県の魚ハタハタ」の在り方を考え、収益を最大化できる流通・販売体制を整える。

参考．秋田県における漁獲量（1月～12月）の推移
 (H30までは農林水産統計、R1は水産振興センター調べ)

		単位:トン		
年		漁獲量		
昭和	40年	16,604		
	41年	20,607		
	42年	18,524		
	43年	20,271		
	44年	13,186		
	45年	13,015		
	46年	12,723		
	47年	14,400		
	48年	13,870		
	49年	18,330		
	50年	17,157		
	51年	9,943		
	52年	4,562		
	53年	3,481		
	54年	1,390		
	55年	1,919		
	56年	1,938		
	57年	1,244		
	58年	357		
	59年	74		
	60年	203		
	61年	373		
	62年	286		
	63年	248		
	平成	元年	208	
		2年	150	
		3年	71	
		4年	40	
		5年		
		6年		
7年		143		
8年		244		
9年		469		
10年		589		
11年		730		
12年		1,085		
13年		1,569		
14年		2,112		
15年		2,969		
16年		3,258		
17年		2,402		
18年	2,625			
19年	1,653			
20年	2,938			
21年	2,648			
22年	1,832			
23年	1,983			
24年	1,296			
25年	1,509			
26年	1,259			
27年	1,148			
28年	835			
29年	527			
30年	605			
令和	元年	780		